The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	18世紀におけるオランダ東インド会社とアジア経済 : 綿と貴金属の貿易を通して
Author(s)	福島, 邦久
Citation	パブリック・ヒストリー. 2012, 9, p. 95-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66506
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Journal of History for the Public (2012) **9**, pp 95-114 ©2012 Department of Occidental History, Osaka University. ISSN 1348-852x
The Dutch East India Company and the Asian Economy in the 18th Century: Focusing on the Trade of Cotton Textiles and Precious Metals
Kunihisa Fukushima

18 世紀におけるオランダ東インド会社とアジア経済

綿と貴金属の貿易を通して

福島邦久

1　はじめに

オランダ連合東インド会社（以下、VOC と略記する）は、1602 年にオランダ国内に複数存在していたアジア貿易を目的とする会社を統合することで成立した。国家からアジア貿易の独占権を与えられていた VOC は、その後 200 年にわたって活動を続け、本国の経済に大きく貢献していた[(1)]。また、アジア経済史の文脈では、VOC は競争相手を武力で排除して香辛料などの貿易を独占し、圧倒的な権力を行使した「支配者」として捉えられてきた[(2)]。このような捉え方は、17 世紀末から 18 世紀にかけてのアジアの経済やアジア域内での貿易を「停滞」の時代と捉える解釈に基づいている。この解釈によると、15 世紀以降に「交易の時代」を迎えて拡大傾向にあったアジア域内での海上貿易は、17 世紀末から 18 世紀前半にかけて銀価格の下落、日本や中国による貿易統制の強化、インドのムガル帝国やペルシアのサファヴィー朝の衰退などが要因となり、停滞の時代を迎えていた。そしてその時代のアジアの貿易を武力で独占しようとしたのがオランダやイギリスなどのヨーロッパ勢力であり、VOC やイギリス東インド会社（以下、EIC と略記する）などが香辛料や綿織物などの主要商品における独占体制を確立したことでアジア人による貿易活動は衰退し、それ以前に成立していた多極的な交易網は破壊された。さらに、この時期にアジアに対するヨーロッパの影響力が強まったことで、19 世紀以降の本格的な植民地化や「自由貿易」体制の強制へとつながっていったと考えられてきた。

しかし、このような伝統的な解釈に対して、最近の研究では、18 世紀のアジア経済が「停滞」ではなくむしろ「展開」の時代を迎えていたということが主張されるようになってきている。確かに国家の視点で考えると 18 世紀のアジア経済・アジア間貿易は停滞していたと解釈

(1)　ヤン・ド・フリース、アド・ファン・デァ・ワウデ（大西吉之・杉浦未樹訳）『最初の近代経済――オランダ経済の成功・失敗と持続力 1500-1815――』名古屋大学出版会、2009 年、433-440 頁。

(2)　VOC をこのような視点から捉えた文献として、永積昭『オランダ東インド会社』近藤出版社、1971 年；鈴木恒之「オランダ東インド会社の覇権」石井米雄編『岩波講座東南アジア史 3　東南アジア近世の成立』岩波書店、2001 年などが挙げられる。

することができるが、よりミクロな民間商人の活動に注目すると、異なる解釈が可能となる。例えば、中国の清王朝は海外貿易の国家による統制を強めようとしていたが、一方で民間の華人商人たちは東南アジア各地に移住して強力な貿易ネットワークを形成していた。また、インドでも中央のムガル帝国は衰退していたが、地方では独立政権が勢力を伸ばしており、それと結びついたEICに属さないイギリス人の私貿易商人が商業活動を活発化させていた。さらに、東南アジアにおいても、ブギス人などの民間商人がVOCの貿易システムをかいくぐって盛んな貿易活動を展開していた。そして、これらの民間商人を担い手として、特に18世紀後半にアジア間貿易は大きく拡大していたということが明らかになってきている[(3)]。つまり、18世紀のアジア海域世界は「停滞」の時代ではなく、ヨーロッパ人を含む多くの商人が活発に交流する「競合と協力」の時代であったのである[(4)]。

このような解釈に基づくと、アジアで他の勢力を排除して貿易を独占的に支配していたとする、従来のVOCに対する解釈は見直しを余儀なくされる。そこで本稿では、18世紀のVOCにとって最も重要な商品であったインド産綿織物と、それを獲得するために必要不可欠であった貴金属の貿易を事例としてVOCのアジアにおける貿易活動を考察し、新しいアジア経済史像に基づいて18世紀におけるVOCとアジア経済との関係の再解釈を行う。そしてこのような再解釈を行うことは、16世紀以降に「中核」となったヨーロッパが、アジアを含む世界の他の地域に対して常に一方的に影響力を行使して、自らの「世界システム」に取り込んでいったとする、ウォーラーステイン以来の世界史像を根本的に見直すことにもつながる[(5)]。

2　18世紀のVOCとインド産綿織物

(1) 綿織物の重要性

本章では、18世紀におけるVOCの貿易活動を綿織物貿易に注目して概観し、VOCにとってのインド産綿織物の重要性を示した上で、関連する先行研究の紹介を行う。

従来の研究では、VOCによる貿易活動の最盛期は17世紀であり、18世紀にはEIC及びフランス東インド会社の台頭や、主力商品であった香辛料のヨーロッパにおける販売価格の下落に伴うアジア・ヨーロッパ間貿易の利益率の低下によって、アジア貿易におけるVOCの重要性は失われていたとする考え方が一般的であった。しかし最近の研究で、VOCは18世紀に

(3)　このような解釈に関しては、弘末雅士『東南アジアの港市世界――地域社会の形成と世界秩序――』岩波書店、2004年；太田淳「18世紀の東南アジアと世界経済」桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008年などを参照。

(4)　島田竜登「近世アジアの交易世界――オランダ東インド会社文書からの接近――」『歴史と地理』634号、2010年、6-11頁。

(5)　ウォーラーステインの提示する世界史像に関しては、イマニュエル・ウォーラーステイン（川北稔訳）『近代世界システム――農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立 Ⅰ・Ⅱ』岩波書店、1981年；同『近代世界システム 1600-1750 ――重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集』名古屋大学出版会、1993年；同『近代世界システム 1730-1840s ――大西洋革命の時代』名古屋大学出版会、1993年などを参照。

図 1　3 つの東インド会社のアジア商品のヨーロッパでの年平均販売額 1725-1769 年（単位：リーブル）
典拠：島田竜登「18 世紀前半におけるオランダ東インド会社のアジア間貿易」『西南学院大学経済学論集』43 巻 1・2 合併号、2008 年、44 頁、表 4 より作成。

入ってもアジアとヨーロッパを結ぶ貿易において重要な存在であり続けていた、ということが明らかになってきている。図 1 は、1725 年から 1769 年におけるオランダ・イギリス・フランスの三つの東インド会社のヨーロッパでの商品販売金額の推移を示している。このグラフから、VOC は少なくとも 1760 年代前半まではイギリス・フランスの両東インド会社に大きな差をつけて最大の販売金額を誇っていたということが分かる。

さらに、近年研究が進んできたアジア間貿易の面から見ると、VOC が上げる利益は 18 世紀になってむしろ増大していた。VOC はアジア・ヨーロッパ間の貿易を第一の目的とする組織であったが、同時にアジア域内で行われるアジア間貿易の主体でもあり、アジア域内でも大規模な貿易活動を展開していた[(6)]。そして後述するように、アジア間貿易は VOC にとって EIC などの他のヨーロッパ勢力にはない大きな利点となっていた。VOC のアジア間貿易に関する研究によると、18 世紀においてもその利益率は拡大し続けており[(7)]、アジア間貿易の利益率増大がアジア・ヨーロッパ間貿易の利益率低下を補う役割を果たしていた。このことから、18 世

(6)　VOC をアジア間貿易の主体として捉えた研究としては、Om Prakash, *European Commercial Enterprise in Pre-Colonial India*, Cambridge, 1998（以下、*European Commercial Enterprise* と略記する）; Ryuto Shimada, *The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the Eighteenth Century*, Leiden, 2006; Els Jacobs, *Merchant in Asia: The Trade of The Dutch East India Company During the Eighteenth Century,* Leiden, 2006 などが挙げられる。

(7)　例えば、島田竜登は VOC による日本銅のアジア間貿易の利益率が 1750 年頃から 1760 年頃にかけて最高水準になったことを指摘している。 島田竜登「18 世紀におけるオランダ東インド会社による日本銅のアジア間貿易――バタヴィア経理局長文書の分析――」『日蘭学会会誌』28 号、2003 年、25-27 頁（以下、「18 世紀におけるオランダ東インド会社による日本銅のアジア間貿易」と略記する）。

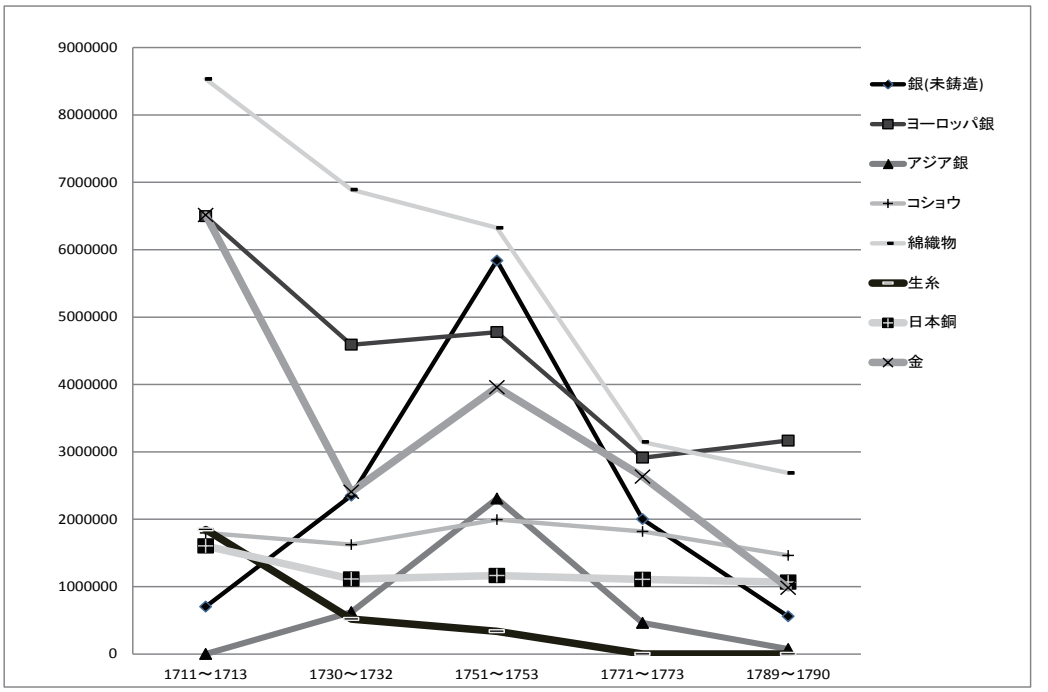

図 2　18 世紀の VOC のアジア間貿易における商品別取引金額の推移（単位：ギルダー）
典拠：Jacobs, *op. cit.*, p. 373, Table 47 より作成。

紀の VOC は、少なくともアジア内では利益の上がる貿易を行い続けており、重要な役割を果たし続けていたと考えられるようになってきている。

そして、このような 18 世紀の VOC の活動を支えていたのが、インド産の綿織物であった。17 世紀の時点では、VOC の対ヨーロッパ輸出の中心商品は香辛料であり、1650 年代には輸出総額の 50 パーセント以上を占めていた。しかしその後、ヨーロッパで香辛料の価格が下落し、以前ほど利益の上がる商品ではなくなると、これに代わってヨーロッパでブームになったのがインド産綿織物であった。このようなヨーロッパ市場における変化に対応して、VOC の対ヨーロッパ輸出に占める香辛料の割合は低下し、1740 年頃には 14 パーセントほどになった。これに対し、綿織物などのインド産品の占める割合は、1650 年頃の約 14 パーセントから 1740 年頃の約 41 パーセントにまで上昇していた。(8) このことから、18 世紀の VOC のアジア・ヨーロッパ間貿易における中心商品は、17 世紀の香辛料から綿織物に移っていたということが分かる。

さらに、綿織物は VOC のアジア間貿易においても重要な役割を果たしていた。インド産綿織物はアジア全域に輸出されており、特に、島嶼部東南アジアでの需要は高かった。(9) アジア間貿易における綿織物の重要性を証明する資料が図 2 である。図 2 は、18 世紀における VOC

(8)　Prakash, *European Commercial Enterprise*, pp. 114-118.

(9)　Anthony Reid, 'Southeast Asian Consumption of Indian and British Cotton Cloth, 1600-1850', in Giorgio Riello and Tirthankar Roy (eds.), *How India Clothed the World: the World of South Asian Textiles, 1500-1850*, Leiden, 2009, pp. 31-34（以下、'Southeast Asian Consumption of Indian and British Cotton Cloth' と略記する）.

のアジア間貿易で取引された商品ごとの金額の推移を示している。図 2 によると、18 世紀のほとんどの時期において VOC のアジア間貿易で最も大きな割合を占めていた商品は綿織物であり、割合としては全体の 15 パーセントから 25 パーセントほどであった。このことは、綿織物がアジア間貿易においても最も重要な商品の一つであったということを示している。

このように、18 世紀の VOC にとって、インド産綿織物はアジア・ヨーロッパ間貿易及びアジア間貿易という二つの貿易における最も重要な商品の一つであった。そのため VOC は、インドで多くの綿織物を確保していく必要があったが、少なくとも 18 世紀半ば頃まではイギリスやフランスなどの東インド会社との激しい競争にさらされながらも一定量の綿織物を確保することに成功していた。しかし、18 世紀後半、特に 1780 年代以降には、VOC の綿織物獲得量は急速に減少している。そこで以下では、18 世紀半ばまで VOC がなぜ効率的に綿織物を確保できていたのかという問題と、その貿易がなぜ衰退することになったのかという問題を、特に金や銀などの貴金属のアジア間貿易に注目して考察することで、18 世紀における VOC とアジア経済との関係をより具体的に明らかにしていきたい。

(2) VOC の綿織物貿易概観

VOC がインドに拠点を築き、綿織物の購入を開始したのは 17 世紀初め頃のことであった。VOC は当初、インドで購入した綿織物の大部分を東南アジアに輸出し、当時のヨーロッパ向け主力商品だった香辛料購入のための対価としていた。つまり、綿織物はアジア間貿易の商品として求められたのである。この後ヨーロッパで綿織物の需要が高まるにつれて、VOC はヨーロッパ向けの綿織物輸出を増加させていき、1680 年頃までは他のヨーロッパ諸国を押さえて最大のヨーロッパへの綿織物の供給者であった。[10] 17 世紀末から EIC が綿織物のヨーロッパ向け輸出を急激に増加させた上、フランス東インド会社の参入で競争が激化したことで、18 世紀に入ると VOC はその地位を失ったが、依然として多くの綿織物をヨーロッパに供給し続けており、アジア・ヨーロッパ間の貿易で大きな役割を果たし続けていた。

18 世紀半ば頃から、EIC はインドにおいて政治的、軍事的影響力を増大させていった。EIC は 1744 年から、ヨーロッパでのオーストリア継承戦争に連動する形でフランス東インド会社との武力衝突を開始した。カーナティック戦争と呼ばれるこの戦争に際して、VOC は中立を保ち、参加することはなかった。一方で、EIC はこの戦いを有利に進め、1757 年のプラッシーの戦いで勝利し、1760 年にはインドからフランス勢力を完全に排除することに成功した。その後 EIC は、1765 年にベンガル地方の徴税権を獲得し、事実上の支配権を確立した。このような EIC の勢力拡大を脅威と感じた VOC は、1759 年にバタヴィアからベンガルへ兵力を派遣しているが、EIC によって撃退されている。そして 1780 年に第四次英蘭戦争が始まると、アジアでも VOC と EIC との間で武力衝突が起こった。この戦争は 1784 年まで続き、VOC は大きな打撃を受けることになった。

(10) Prakash, *European Commercial Enterprise*, pp. 111-127.

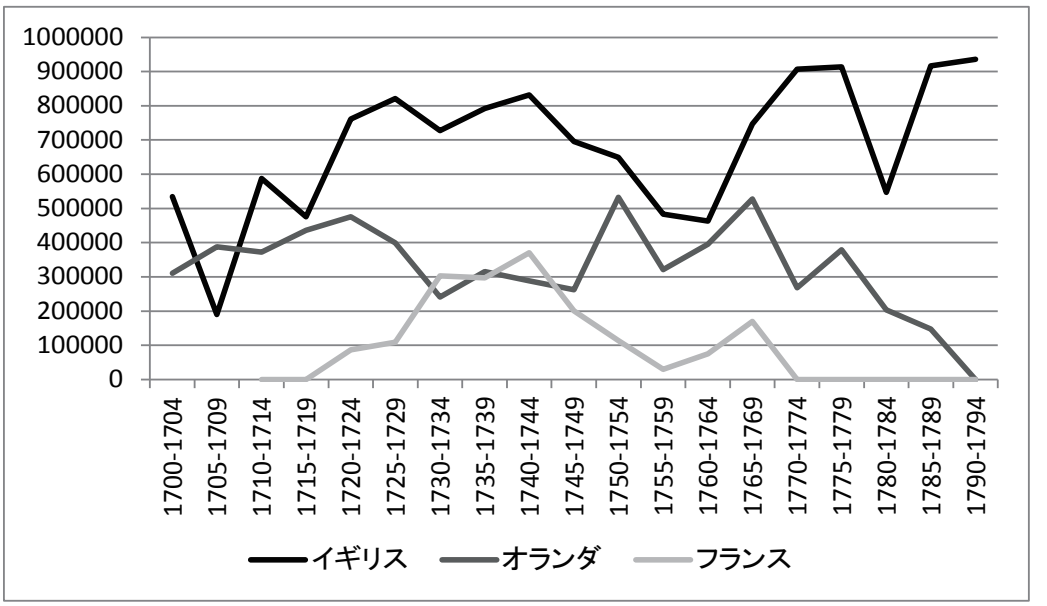

図3　3つの東インド会社による対ヨーロッパ綿織物輸出量の推移（単位：反）
典拠：Giorgio Riello, 'The Globalization of Cotton Textiles: Indian Cottons, Europe, and the Atlantic World, 1600-1850', in Giorgio Riello and Prasannan Parthasarthi (eds.), *The Spinning World: A Global History of Cotton Textiles, 1200-1850*, Oxford, 2009, p. 265, Table 13. 1. より作成。

この時期にVOCの綿織物貿易は衰退していった。図3は、18世紀にオランダ・イギリス・フランスの三つの東インド会社がアジアからヨーロッパへ輸出した綿織物の量の推移を示している。図3によると、18世紀のVOCの対ヨーロッパ綿織物輸出量は増減を繰り返しながらも約30万反から約50万反の間を推移しており、1750年代前半と1760年代後半には18世紀を通しての最高水準に達していた。対ヨーロッパ輸出量をフランス東インド会社と比べると、ほぼすべての年代で上回っていることが分かる。またEICと比べても、総量では劣っているが年代によってはEICに近い量の綿織物をヨーロッパに輸出している。さらにVOCはEICと異なり、アジア間貿易にも相当量の綿織物を回していたため[(11)]、この量を加えれば差はかなり縮まると考えられる。しかし1780年代以降、VOCの対ヨーロッパ綿織物輸出量は急速に減少していき、1790年代には皆無になった。もちろんこの時期にヨーロッパで綿織物需要が減少していたというわけではなく、EICは変わらず大量の綿織物をヨーロッパへ輸出し続けている。また、図2から明らかな通り、18世紀末にはアジア間貿易での綿織物の取扱量も大きく減少していた。このような綿織物貿易の不振が続く中、VOCは経営不振に陥り、フランス革命の混乱の中で1799年には解散することになった。

(11)　VOCがその貿易で取り扱った綿織物のうち、ヨーロッパへ輸出されたものの割合は、18世紀を通して、30パーセントを超えることはなく、残りはアジア市場に回されていた。Giorgio Riello, 'The Indian Apprenticeship: the Trade of Indian Textiles and the Making of European Cottons', in Riello and Roy (eds.), *op. cit.*, pp. 330-331.

(3) 綿織物貿易の不振を巡る諸解釈

VOC の綿織物貿易の不振は、EIC のインドでの政治的影響力拡大の文脈の中で理解されてきた。つまり、プラッシーの戦いを経てベンガル地方の支配者となっていった EIC が、競争相手であった VOC のインドにおける活動を制限し、VOC の綿織物貿易を妨害したことが VOC に深刻な打撃を与えたということである。例えば羽田正は、1759 年の EIC の VOC に対する軍事的勝利が VOC などの他のヨーロッパの東インド会社を抑えることにつながったとしている。[12]

確かに、プラッシーの戦い以降の EIC の勢力拡大が VOC の綿織物貿易に打撃を与えたことは間違いない。しかし、この打撃が VOC の解散に直接つながるほどのものであったかどうかについては疑問が残る。エルス・ヤコブスによると、EIC はプラッシーの戦いの後、確かにベンガルにおいては圧倒的な優位を確立したが、ベンガルに並ぶ有力な綿織物輸出地であったコロマンデル海岸を始めとするインドの他の地域では、イギリスによる支配がそれほど強力ではなく、VOC は従来の貿易体制を維持することができていた。[13] さらにヤコブスは、VOC はベンガルにおいても EIC に属さないイギリス人私貿易商人と協力関係を築くことで、ある程度綿織物獲得量を回復させることに成功していたと述べている。[14] ヤコブスのこのような分析は、オム・プラカッシュの数量的な分析とも一致している。プラカッシュによると、プラッシーの戦い以降も 1770 年代初め頃までは、コロマンデル海岸からの綿織物輸出量は減少しておらず、[15] ベンガルからの輸出量も 1780 年代初め頃までは一定量を維持していた。[16] さらに、図 3 からも、VOC の対ヨーロッパ綿織物輸出量が大きく減少し始めるのは 1780 年代以降である、ということが分かる。つまり、VOC の綿織物貿易は一定の制限を受けることにはなったが、それによって貿易が極端に衰退したわけではなかったということである。そこでヤコブスやプラカッシュは、1780 年に始まった第四次英蘭戦争を重視しており、この戦争で EIC によって多くの VOC 商船が拿捕されたことが VOC に決定的な打撃を与えることになったと主張している。

このような、戦争などの政治的な要因が VOC の貿易活動を不振に追い込んだ決定的な要因の一つであったことは間違いない。これに対し、経済的な視点からより長い期間を視野に入れた研究として、島田竜登による VOC の日本銅のアジア間貿易に関する研究が挙げられる。島田によると、銅は 18 世紀において南アジア全域でさまざまな用途で使用される重要な商品であり、高価で取引されていた。島田は、当時ヨーロッパ勢力として唯一日本との貿易を許されていた VOC が、18 世紀を通じて一定量の銅を対日本貿易で確保することに成功し、[17] その

(12) 羽田正『興亡の世界史 15　東インド会社とアジアの海』講談社、2007 年、302-303 頁。

(13) Jacobs, *op. cit.*, pp. 136-137.

(14) *Ibid.*, pp. 139-141.

(15) Prakash, *European Commercial Enterprise*, p. 222.

(16) *Ibid.*, p. 196.

(17) 当時の日本はアジアの中でも有力な銅産出国であった。

銅を綿織物の産地であるインドに供給することができていたという点が、他の東インド会社にはない大きな利点になっていたと述べている。[18] しかし、1720 年代から 18 世紀後半にかけて、EIC がイギリス本国における製銅業の発展を背景に、安価なイギリス銅を大量にインドに対して供給するようになり、その量が VOC による日本銅輸出を凌駕するようになったことで、VOC のインドへの銅供給者としての役割が薄れ、VOC のインドにおける貿易が不振に陥ったと島田は主張している。[19]

3　VOC のアジア間貿易と貴金属

(1) 貴金属の重要性

島田の研究は、当時アジア間貿易で高い利益率を誇り、南アジアで大きな販路を持っていた銅を通して VOC のアジア間貿易を分析し、それまでの研究にはなかった経済的・長期的な視野で VOC の衰退の要因を探っているという点で大きな意義がある。しかし、分析対象を銅に絞っているという問題点がある。18 世紀に VOC が綿織物の対価としてインドに輸出していた銅に並ぶ重要商品として、銀や金などの貴金属が挙げられる。図 4 は、1711 年から 1713 年と、1751 年から 1753 年という二つの年代における、VOC によるインドのベンガル地方に対する輸出総額に占める各商品の割合を示している。図 4 によると、1711 年から 1713 年の期間における VOC のベンガル地方に対する輸出品のうち、約 83 パーセントを占めていたのは銀であった。銀が圧倒的な割合を占めるという傾向は 18 世紀半ば頃にも変わることはなく、1751 年から 1753 年の期間においても約 85 パーセントを銀が占めている。このことから、ベンガル地方に対する輸出品としては、銀が非常に重要であったということが分かる。

一方、図 5 は、図 4 と同じ時期のコロマンデル海岸に対する輸出品の構成を示している。図 5 によると、1711 年から 1713 年の期間における VOC のコロマンデル海岸に対する輸出のうち最も大きな割合を占めていたのは金であり、その割合は約 85 パーセントであった。1751 年から 1753 年の期間には銀の割合が高く、約 30 パーセントを占めるようになっているが、金の割合も約 47 パーセントであり、金と銀で 80 パーセント近くを占めている。つまり、コロマンデル海岸に対する輸出品としては貴金属、特に金が重要であったということである。

銀か金かという違いはあったが、[20] どちらの地方への輸出においても貴金属が圧倒的な割合を占めていたという点では共通している。インドの中でも特に綿織物の有力な生産地であったベンガル・コロマンデル両地方への輸出の多くを貴金属が占めていたという事実は、VOC がインド産綿織物を効率的に購入するためには大量の貴金属を確保することが必要不可欠であっ

(18)　島田竜登「オランダ東インド会社のアジア間貿易――アジアをつないだその活動――」『歴史評論』644 号、2003 年、13 頁（以下、「オランダ東インド会社のアジア間貿易」と略記する）。

(19)　島田「オランダ東インド会社のアジア間貿易」、14 頁。

(20)　この違いの主な原因は、当時のベンガルが銀を主要な通貨とする銀経済圏であったのに対し、コロマンデルは金経済圏であったからであると考えられている。Jacobs, *op. cit.*, pp. 157-158.

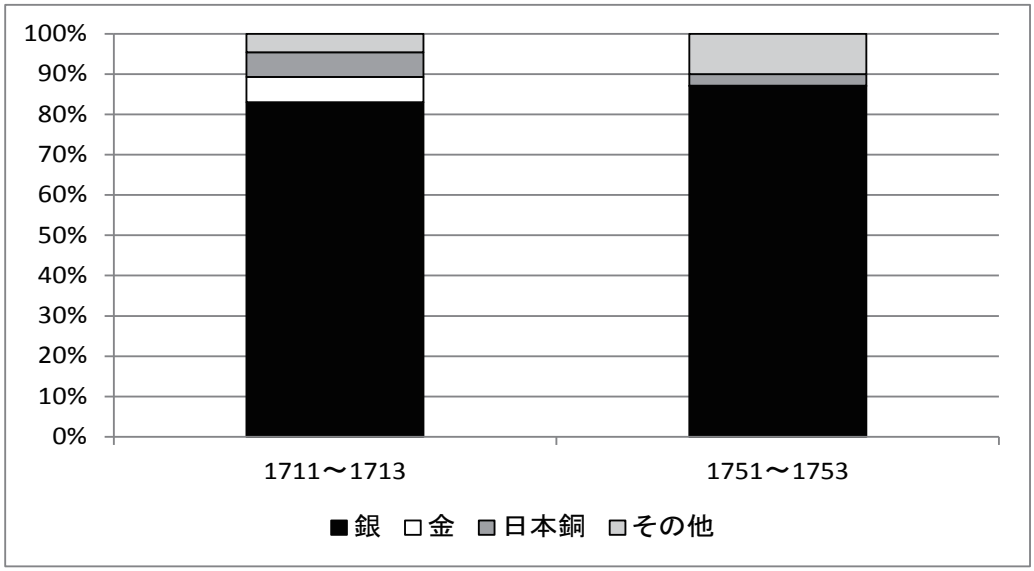

図 4　VOC の対ベンガル輸出品構成
典拠：Jacobs, *op. cit.*, p. 327, Table 15. b. より作成。

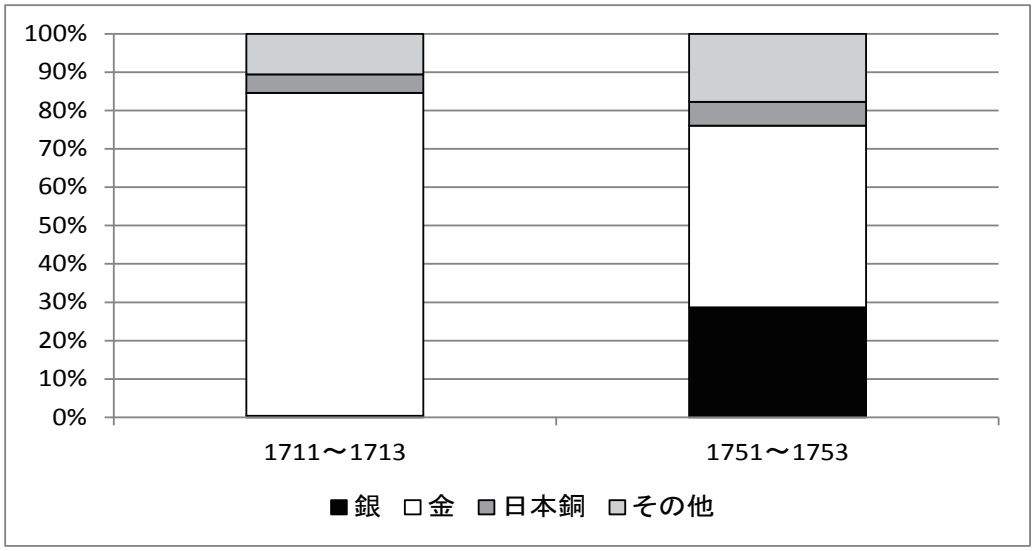

図 5　VOC の対コロマンデル輸出品構成
典拠：Jacobs, *op. cit.*, p. 323, Table 13. b. より作成。

た、ということを示している。そこで、本章では VOC がどのように貴金属を確保していたのかという問題を、アジア間貿易に注目して考察していく。

(2) アジア間貿易と貴金属

アジア貿易を行う際、オランダは他のヨーロッパ諸国と同様にアジア商品の対価となりうる商品を持っていなかった。そこで VOC は、スペイン領のアメリカ大陸からヨーロッパにもた

らされていた貴金属、特に銀を喜望峰経由でアジアに輸出し、現地で貨幣として鋳造してアジア産品購入の資本とした。銀はアジアにおいて非常に高い価格で取引されており、当時のヨーロッパにおける金と銀の交換比率が 1 対 12 であったのに対し、ペルシアでは 1 対 10、インドでは 1 対 8、中国では 1 対 6 であった。[21] つまり、アジアにおける銀の価値はヨーロッパに比べて高かったということであり、ヨーロッパ人にとって銀はアジアに持っていくだけで価値が上がる非常に重要な商品であった。そのため大量の銀がヨーロッパからアジアへ流出していくことになった。

このような状況下でヨーロッパ人がアジア貿易における利益を大きくするためには、アジア内で一定量の貴金属を確保し、ヨーロッパからの銀輸出を抑えることが必要であった。17 世紀の VOC は、当時アジア最大の銀産出国であった日本との貿易を通じて大量の貴金属を獲得することに成功していた。当時の日本は VOC 以外のヨーロッパ勢力との貿易を行っていなかったため、VOC にとって日本との貿易は他のヨーロッパ勢力に対する大きな利点となっていた。しかし、この貴金属輸出は 17 世紀末に江戸幕府によって禁止され、VOC が日本から貴金属を獲得することはできなくなった。多くの研究者は、これによって VOC がアジアに送らなければならない貴金属の量が急増したということを指摘し、アジア内で貴金属を得ることが困難になったことで、VOC の他のヨーロッパ勢力に対する優位は失われたとしている。[22]

確かにこの時期にオランダからアジアに送られた貴金属の量は増加しており、日本との貿易で貴金属を確保できていた時期の圧倒的に有利な立場は失っていた。しかし実際には、18 世紀にも VOC はアジア間貿易を通じて一定量の貴金属を確保することに成功していた。そのため、18 世紀を通じて、VOC はアジアへの貴金属輸出を EIC に比べて低く抑えながら EIC 以上の規模の貿易を行うことに成功していた。[23] つまり、VOC は 18 世紀においても、他のヨーロッパ勢力に対する優位をある程度維持することに成功していたといえる。

18 世紀の VOC は、アジア間貿易全体を通じて貴金属の量を増加させることで大量の貴金属を確保していた。オランダから喜望峰を経由してアジアへ輸出されたアメリカ大陸産の銀[24]の大部分は、アジアにおける VOC の拠点であったバタヴィアに集められた。この銀はすぐにヨーロッパ向け商品購入に充てられたわけではなく、いったんアジア間貿易に投資された。VOC が銀を投資したアジア間貿易のルートは無数に存在していたが、その中でも最大のものはインド・東南アジア・日本を結ぶ「三角貿易」であった。[25]

銀はまず、銀経済圏であったインドのベンガル地方へ輸出された。そして VOC は銀と引き換えにインド産綿織物を購入し、銀はインド内部で流通することになった。ここで VOC が獲

(21) デニス・フリン（秋田茂・西村雄志訳）『グローバル化と銀』山川出版社、2010 年、52 頁。

(22) 羽田、前掲書、307-308 頁。

(23) Om Prakash, 'Precious-Metal Inflow into India in the Early Modern Period', in Dennis Flynn, Arturo Giraldez and Richard von Glahn (eds.), *Global Connections and Monetary History, 1470-1800*, Aldershot, 2003, p. 152.

(24) この時期には、大部分がメキシコ産であった。フリン、前掲書、53-54 頁。

(25) 島田「オランダ東インド会社のアジア間貿易」、5 頁。

得したインド産綿織物は、すぐにヨーロッパへ輸出されたわけではなく、アジア各地へ輸出されていた。特に東南アジアの香辛料産地ではインド産綿織物に対する需要が高く、その利益率は非常に高かったため、VOC は東南アジアで綿織物を販売することで大きな利益を上げていた。綿織物の販売で利益を得た VOC は、東南アジアで砂糖・香木・染料などの商品を購入し、それらを日本に向けて輸出した。日本ではそれらの商品と引き換えに銅を獲得し、その日本銅がインドに向けて輸出されていた。日本銅はインドにおいて需要が高く利益率が高い商品であったため、VOC はインドで日本銅を販売することで大きな利益を上げた。インドで日本銅を販売した際の利益はインド内部で流通していた銀の形で得られたため、VOC は結果的にアジア商品を媒介にしたアジア内の貿易ネットワークを通じて、最初に投資した以上の銀を手に入れることに成功していた。

この「三角貿易」以外にも、VOC が貴金属の形で利益を得ていた貿易は数多く存在した。[26] その中でも、18 世紀前半にアジア内で金を獲得するために重要であったのが、ペルシアとの貿易である。VOC は 17 世紀前半からバンダレ・アッバースに商館を置いてペルシアとの貿易を行っていた。そして、当時のペルシアには、陸上交易ルートを通じてヨーロッパから大量の貴金属が流入していたため、[27] VOC はペルシアに対する輸出の対価を金で得ることができた。17 世紀末に日本が貴金属輸出を制限するようになると、VOC にとってのペルシアとの貿易の重要性は高まっていき、18 世紀初め頃にはペルシアがアジア内で最も多くの金を獲得できる地域となっていた。VOC は、ペルシアに東南アジアで綿織物と引き換えに購入した砂糖や香辛料を輸出して、それらを販売してペルシアから金を獲得し、その金を綿織物購入のためにコロマンデル海岸に輸出していた。1711 年から 1713 年の間に、VOC がペルシアに対してアジア内の他の地域から輸出した砂糖などの商品の総額が約 28 万 7400 ギルダーであったのに対し、それと引き換えにペルシアで VOC が獲得した金の総額は 86 万ギルダーほどであった。このことは、ペルシアとの貿易が非常に大きな利益を生むものであったということを示している。同じ期間にコロマンデル海岸に向けてアジア内の他の地域から輸出された金の総額は約 103 万ギルダーであったことから、VOC がコロマンデル海岸で綿織物を購入する際にペルシア産の金が大きな役割を果たしていたということが分かる。

しかし、1730 年代には VOC のペルシアとの貿易は急速に衰えていくことになる。その最大の原因はペルシアの政治的な混乱である。当時のペルシアの王朝であったサファヴィー朝がアフガン人の侵入を受けて混乱し、1736 年に滅亡すると、ペルシアとの貿易は困難になっていった。1730 年から 1732 年の間に VOC がアジア内からペルシアに輸出した商品の総額は 14 万 8000 ギルダーほどであったが、獲得した金の総額は 5 万 6000 ギルダーほどにまで減少してお

(26) 以下で行う分析では、エルス・ヤコブスの提供する VOC のアジア間貿易に関する数量的なデータを用いている。Jacobs, *op. cit.*, pp. 305-373（なお、ペルシアに関しては Table 18、コロマンデルに関しては Table 13、広東に関しては Table 21、パダンに関しては Table 19、スーラトに関しては Table 14、ベンガルに関しては Table 15 をそれぞれ参照した）.

(27) *Ibid.*, pp. 159-160.

り、十分な金を確保することができなくなっていた。そのためVOCは、コロマンデル海岸向けの金を確保するための新たなアジア間貿易ルートを開拓する必要に迫られた。そして、ペルシアに代わって金の輸出元となったのが中国とスマトラ島であった。

VOCが広東で中国と初めて国交を開き、貿易を開始したのは1729年だった。金は広東での対中国貿易において、茶に並ぶ最重要商品であった。VOCは中国に銀を輸出して金と交換するという貿易を行っていたが[28]、前述の通り中国はアジアの中でも特に銀の価値が高い地域だったため、VOCは有利なレートで銀と金を交換することができ、大きな利益を得ることになった。その結果、VOCは1751年から1753年の期間に中国で約42万ギルダーの金を獲得することに成功している。また、当時VOCが勢力を拡大していたスマトラ島にも金山が存在した。そこでVOCはスマトラ島のパダンに商館を置いてインド産綿織物などを販売し、それと引き替えにスマトラ島産の金を獲得していた。この貿易もまたVOCに利益をもたらしており、VOCは1751年から1753年の期間に約28万ギルダーの金をスマトラ島で獲得した。そして中国とスマトラ島で獲得した金もペルシアで獲得されていた金と同様に、綿織物購入のためコロマンデル海岸へ輸出されていた。

さらに、VOCは1750年代になると、インド西部のグジャラート地方で銀を獲得するようになった。当時、グジャラート地方では、南アジアの他の地域と同様に、銀貨が広く流通していた一方で、砂糖や香辛料などの東南アジア産品や、日本銅などに対する需要があった[29]。そこでVOCは、スーラトに置いた商館を拠点にグジャラート地方へこれらの商品を輸出し、対価として銀を得た。1751年から1753年の間にVOCはグジャラートで約47万ギルダーの銀を獲得している。その銀はやはりベンガル地方に輸出され、綿織物購入に充てられた。同じ時期にベンガル地方に輸出された銀の総額は約300万ギルダーで、グジャラートで獲得した銀の割合が極端に高かったというわけではないが、本国からの銀輸出を抑えるという意味では、このグジャラートからの銀も大きな役割を果たしていたと考えられる。

(3) 大規模なアジア間貿易を実現できた要因

ここまで考察してきたように、VOCはペルシアから日本までのアジア全域に広がった交易ネットワークを活用してアジア各地で貴金属取引を行っていた。このような、アジアに銀を持ち込み、購入したアジア商品を媒介として銀をアジア内で流通させ、再び銀や金の形でその利益を得るというサイクルを繰り返すことで、VOCは最初に投資した以上の貴金属を得ることに成功していた。そして、このシステムを通して得られた貴金属が綿織物を始めとするヨーロッパ向け商品の購入に用いられていたのである。つまり、このシステムこそが、VOCの綿織物貿易を支えていた重要な要素であったといえる。そして、このネットワークを形成し、維持するために必要であったのが、VOCの強大な資金力とアジアにおける海軍力、そして現地の商

(28) Paul A. Van Dyke, *The Canton Trade: Life and Enterprise on the China Coast, 1700-1845*, Hong Kong, 2005, p. 120.
(29) Jacobs, *op. cit.*, p. 104.

人との協力関係であった。

当時のアジアで利益の上がる大規模なアジア間貿易を行うためには、アジア間貿易に自由に投資することのできる資本が大量に必要だった。1602 年に VOC が設立された際、集められた資本は約 642 万ギルダーであった。[30] これに対しその 2 年前に設立された EIC が集めた資本は約 53 万ギルダーであり、VOC は EIC の 12 倍以上という莫大な資本を持って設立されたということになる。[31] しかも EIC の資本が 1 回の航海のたびに清算されて出資者に返還されていたのに対し、VOC の資本は 1 回の航海で清算されることなく 10 年間据え置かれ、その期間中は会社が自由に資本を使うことができた。このように、大量の資本を自由に使うことができたからこそ、VOC はアジア間貿易に大量の資本を投下することができたのである。

また、VOC はアジアにおける軍事力でも他のヨーロッパ勢力を上回っていた。東インド会社の船は商船でありながら大砲を積んだ軍艦でもあり、船の数の差がそのまま軍事力の差につながっていたが、VOC が 17 世紀から 18 世紀にかけてアジアに送った船の数は他のヨーロッパ諸国をはるかに上回っていた。[32] さらに 1 隻あたりのトン数もイギリスやフランスなどの船に比べて大きかったため、同じ量の商品をヨーロッパに輸送するために用いる船の数をより少なく済ませることができた。そのため本国に帰還させることなくアジア内で運用することができた船の数が多く、アジアにおける海軍力で他勢力を上回ることが可能になり、より大規模なアジア間貿易を行うことができたのである。軍事力で他のヨーロッパ勢力を上回ることができた VOC は、17 世紀の時点でポルトガル勢力からマラッカなどの拠点を奪った上、東南アジアにおける貿易活動から EIC をほぼ排除することに成功した。さらに、VOC は、当時のアジア間貿易において重要な役割を果たしていた日本との貿易をヨーロッパ勢力として唯一許されていた。これらの要素が重なったことで、VOC は EIC などの他のヨーロッパ勢力には実現できなかった大規模なアジア間貿易ネットワークを築き、18 世紀まで維持することができたのである。

これを支えていたのが、オランダ本国の造船能力であった。17 世紀以降、オランダの造船業は急速に発展し、ヨーロッパ内では圧倒的な造船能力を持つほどになっていた。VOC も自らオランダ国内に造船所を所有し、年平均で大小合わせて 10 隻前後の船を建造しており、その建造数は 1750 年頃までは減少することなく 17 世紀以来の高い水準を維持していた。[33] また性能面でもオランダの船は他のヨーロッパ諸国の船に比べて優れていた。性能の高い船を自らの手で建造できたという点は VOC にとって大きな利点となっており、他のヨーロッパ勢力を排除しながらアジア間貿易のネットワークを築くためには必要不可欠であった。

---

(30) Femme Gaastra, *The Dutch East India Company: Expansion and Decline*, Zutphen, 2003, p. 26.

(31) 永積、前掲書、67 頁。

(32) 島田竜登「18 世紀前半におけるオランダ東インド会社のアジア間貿易」『西南学院大学経済学論集』43 巻 1・2 合併号、2008 年、39-40 頁。

(33) J. R. Bruijn, Femme Gaastra and Ivo Schöffer (eds.), *Dutch-Asiatic Shipping in the 17th and 18th Centuries*, The Hague, 1987, p. 52.

これらの本国側の要因と同等、もしくはそれ以上に重要であったのが、アジアにおける現地商人との協力関係であった。VOC は大規模なアジア間貿易ネットワークを築いていたとはいえ、広大なアジアの貿易のすべてを支配下におさめることは不可能であった。海軍力で VOC が排除できたのはあくまでも他のヨーロッパ人のみであり、現地に深く根ざしていたアジア人商人まで排除することは困難だった。そのため当時のアジアでは、華僑やブギス人などのアジア人の民間商人も活躍しており、そのような商人たちは、VOC にとってアジア間貿易における重要な取引相手となっていた。アジアではヨーロッパ人よりもアジア人の方がはるかに多かったということもあり、VOC も取引相手としてのアジア人商人たちとの関係を軽視するわけにはいかなかったのである。VOC が現地商人と協力関係を築いていた例として、ジャワにおける砂糖生産をめぐる華僑商人との関係が挙げられる。砂糖はペルシアや日本、グジャラートなどに対する有力な輸出品であり、アジア内で貴金属を獲得するために必要不可欠な商品であった。そのため VOC は、砂糖を安く入手するために、勢力下に置いていたジャワで砂糖の生産を行うようになり、この砂糖生産を高い製糖技術を持っていた福建系の華僑に請け負わせていた[34]。生産を請け負った華僑は、現地領主から土地を借り受け、ジャワの住民や流入してきた華僑を労働力として砂糖キビ栽培と加工工場を経営し、生産した砂糖を一定の値段で VOC に供給していた。この形態での砂糖生産は 1680 年代に始まっていたが、1720 年代までには生産量も大幅に増大し[35]、ここで生産された砂糖が VOC のアジア間貿易で大きな役割を果たすようになっていた。つまり、VOC は砂糖を安価で入手するために福建系華僑の協力を必要としていたということであり、この例に見られるように、VOC がアジア間貿易で貴金属の対価となる商品を効率よく獲得していくためには、華僑など現地のアジア人との協力関係を築くことが必要不可欠であった[36]。

4　VOC のアジア間貿易の衰退

(1) アジア間貴金属貿易の衰退

図 6 は、18 世紀の五つの時期においてオランダからアジアへ輸出された貴金属の総量と、VOC のアジア間貿易でアジア内を流通した貴金属の総量をそれぞれ示している。図 6 によると、1711 年から 1713 年の間にオランダからアジアに送られた貴金属の総額は 300 万ギルダー

(34)　1710 年の時点で、バタヴィア周辺には 130 カ所の砂糖生産工場があり、84 人の経営者たちがそれらの工場を経営していたが、そのうちの 79 人は華僑であった。Leonard Blussé, *Strange Company: Chinese Settlers, Mestizo Women and the Dutch in VOC Batavia*, Dordrecht, 1986, p. 90.

(35)　籠谷直人「東アジアにおける自由貿易」籠谷直人・脇村孝平編『帝国とアジア・ネットワーク――長期の 19 世紀――』世界思想社、2009 年、145 頁。

(36)　ジャワにおける商品作物生産をめぐるオランダ人とアジア人との関係に関する研究としては、これ以外にも、Atsushi Ota, *Changes of Regime and Social Dynamics in West Java: Society, State and the Outer World of Banten 1750-1830*, Leiden, 2006; 大橋厚子『世界システムと地域社会――西ジャワが得たもの失ったもの 1700-1830――』京都大学学術出版会、2010 年などが挙げられる。

ほどだったが、アジア内で取引された貴金属の総額は約 1370 万ギルダーにのぼる。これは、この時期にアジア内で活発な貴金属取引が行われていたということを示しており、その利益も非常に大きかったと考えられる。その後 1730 年代初めに貴金属のアジア内流通量は一時減少するが、1750 年代には再び上昇し、1700 万ギルダーに近い量の貴金属がアジア内を流通している。しかし、その後貴金属のアジア間貿易は急速に衰退していき、1789 年から 1791 年の期間になるとアジア間貿易で流通した貴金属の量は 477 万ギルダーほどに減少している。

一方で、オランダからアジアへの貴金属輸出量は、少しずつではあるが 18 世紀を通じて上昇し続けている。つまり、18 世紀後半の VOC は、オランダから送る貴金属の量を増やしているにも関わらずアジア内で取引される貴金属の量は減少しているという状態にあったということであり、この事実は、18 世紀後半に VOC による貴金属のアジア間貿易が衰退していたということ示している。前章で示した通り、貴金属はインドでの綿織物獲得の際に大きな役割を果たしていたため、アジア間貿易を通じての貴金属の確保が困難になっていったことは、VOC の綿織物貿易不振を招いた大きな要因の一つになったと考えられる。さらに、図 3 と図 6 を比較すると、VOC の対ヨーロッパ綿織物輸出減少の時期がアジア内貴金属貿易の衰退の時期とほぼ重なっていることが分かる。このことも、VOC の綿織物貿易とアジア内での貴金属貿易が密接に関わっていたということを示している。そこで本章では、ヨーロッパとアジアの双方の視点から VOC のアジア内での貴金属貿易衰退の要因を考察していきたい。

(2) 本国側の要因

18 世紀のオランダ本国は、スペイン継承戦争、オーストリア継承戦争、第四次英蘭戦争など、相次ぐ戦争に巻き込まれ、国家財政は疲弊していた。このような状況下で、オランダ国内の産業もまた停滞することになり、VOC の活動を支えていた造船業も急速に衰退していった。特に、17 世紀以来オランダの造船業の中心であったザーン地域における造船業の衰退は著しく、1730 年代に年間 100 隻ほどだったザーン地域の外洋船建造数が 1770 年代には年間 20 隻から 25 隻ほどにまで減少していた[37]。さらに、イギリスやフランスなど他の国でも造船業が発達し、技術革新が起こったことで、オランダ製の船は性能の面で他の国に劣るようになっていった。このような状況に、VOC 自体の経営難も重なり、18 世紀後半には VOC の所有する造船所での船の建造数は次第に減少していくことになった[38]。

こうしてオランダの造船業は急速に衰退していったが、これは VOC のアジアにおける活動にも影響を与えることになった。実際に、VOC がアジアに派遣した船の数は 1740 年ごろを頂点として、それ以降は減少傾向にある[39]。そのためアジア間貿易のネットワークを維持するために必要であった軍事力が低下することになった。また船の質でも EIC に太刀打ちできなくなっていた VOC は、1780 年に始まった第四次英蘭戦争で船の多くを拿捕され、利用できる船

(37) ド・フリース、ファン・デァ・ワウデ、前掲書、278 頁。
(38) Bruijn, Gaastra and Schöffer (eds.) , *op. cit.,* p. 52.
(39) *Ibid.*, p. 144.

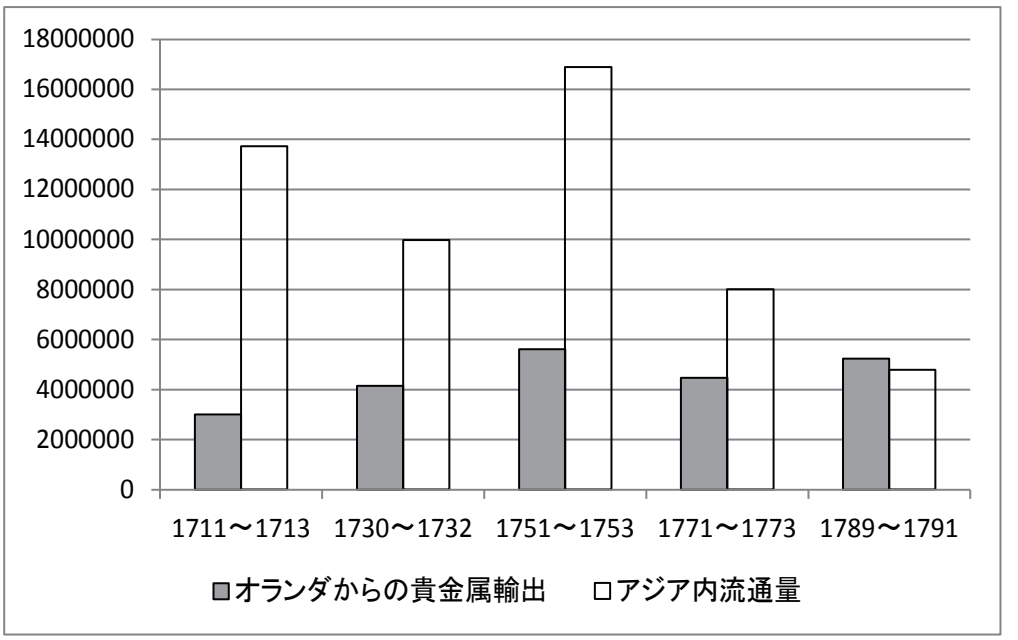

図 6　VOC の対アジア貴金属輸出量とアジア内流通量（単位：ギルダー）
典拠：Jacobs, *op. cit.*, p. 354, Table 35. a. 及び p. 373, Table 47 より作成。

が半減するという結果を招いた。このことから、本国における造船業の衰退は、VOC のアジア間貿易を支えていた重要な要素の一つを失わせることにつながったということが分かる。

(3) アジアにおける銀価格の下落とその影響

次に、18 世紀後半のアジアで起こった変化について考察していきたい。デニス・フリンによると、18 世紀前半にアジア、特に中国へ銀が大量に流入したことで、ヨーロッパに比べ高い銀価格を維持していたアジアにおいて、銀価格の下落が起こった。1750 年までに中国の銀価格は世界の他の地域並みになったと考えられている[40]。この変化は、VOC の貴金属貿易に打撃を与えることになった[41]。前章で論じた通り、VOC は中国で銀と金を交換するという貿易を行っていた。しかし銀価格の下落により、VOC がこの貿易で獲得できる金の量は急激に減少することになった。1751 年から 1753 年の期間に VOC が広東で獲得した金の総額は、前述の通り、約 42 万ギルダーであった。しかし、約 20 年後の 1771 年から 1773 年の期間には、VOC が広東で獲得した金は皆無になっている。他方、この期間に中国に対する VOC の輸出が減少していたわけではなく、銀の輸出量はむしろ増加している。これは、中国で銀と金を交換するという貿易が利益を生むものではなくなっていたということを意味している。フリンによると、対中国貿易において銀に代わって利益率の高い商品となったのはアヘンであった。しか

(40)　フリン、前掲書、54 頁。
(41)　以下で行う分析も、前章の数量的分析と同様に、ヤコブスの提供するデータに基づいている。Jacobs, *op. cit.*, pp. 305-373.

し、有力なアヘンの生産地であるインドのベンガル地方は、18 世紀後半には EIC が勢力を拡大していた地域であり、VOC は思うようにアヘンを獲得することができなかった。そのため、VOC が中国で金を獲得するのはますます困難になっていった。

アジアにおける銀価格の下落は、相対的な金価格の上昇と、アジア内での貴金属貿易の利益率の低下につながった。そしてこの影響は、VOC にとって中国に次ぐ金の獲得地であったスマトラ島との貿易にも及んだ。1751 年から 1753 年にかけて、VOC はスマトラ島のパダンの商館へ綿織物を始めとする合計 18 万ギルダーほどの商品を輸出し、引き換えに 28 万ギルダーほどの金を獲得していた。この時期のパダンからの輸出品の大部分はこの金が占めている。しかし、1771 年から 1773 年の期間になると、パダンに対する輸出が約 28 万ギルダーと大幅に増加しているにもかかわらず、パダンで獲得できた金は約 21 万ギルダーほどに減少していた。この時期にもパダンからの輸出の大部分は金が占めていたため、パダンで他の商品を多く購入していたというわけではない。つまり、これは金の価格が大幅に上昇していたために起こったと考えられる。1789 年から 1791 年の期間になっても状況は改善しておらず、約 16 万ギルダーの輸出に対し、獲得できた金は 12 万ギルダーほどに減少している。つまり、40 年前とほぼ同じ金額の商品を輸出して、半分以下の金しか獲得できなくなっていたということである。

このように、アジア内で金価格が上昇し金を獲得するのが困難になるという状況に直面した VOC は、本国からの金輸出を増加させることで対応せざるを得なかった。1751 年から 1753 年の間に VOC がアジアに輸出した金の総額は、約 8 万 7000 ギルダーであった。しかし、20 年後の 1771 年から 1773 年の期間になると、その量は 10 倍近い 86 万ギルダーほどにまで増加している。[(42)] つまり、VOC の持っていた、アジア間貿易を通じて金をアジア内で獲得できるという利点は、次第に失われていったということになる。

さらに、インド・東南アジア・日本を結ぶ「三角貿易」を通じて銀の量を増やすという貿易も、困難に直面していた。大きな要因はインドにおける銀と日本銅の価格の下落であった。インドでも中国と同様に銀の価値が下がっていたため、同じ量の銀で購入できる綿織物の量が減少していた。さらに、島田竜登によると、インドでの銅の販売価格と、それによって上げられる利益は 1760 年代を頂点にして、それ以降は下落傾向にあった。[(43)] これらの要因により、「三角貿易」によって獲得できる銀の量が減少し、その結果インドで購入できる綿織物の量が減少し、アジアの他の地域に輸出できる綿織物の量が減少してさらにアジア間貿易の規模が縮小してしまうという悪循環に陥っていたのである。

(4) アジア人商人との関係の変化

また、VOC と現地のアジア人たちとの関係にも変化が生じていた。その一つの例が、ジャワにおける福建系華僑との関係の希薄化であった。VOC と福建系華僑が砂糖生産をめぐって

(42) *Ibid.*, p. 355.

(43) 島田「18 世紀におけるオランダ東インド会社による日本銅のアジア間貿易」、27-29 頁。

協力関係を築いていたジャワでは、18 世紀半ばごろから、VOC が砂糖の販売価格の下落を避けるために砂糖の生産調整を行うようになった。[44] このように、VOC の側が労働力の増加を望まなくなっていたにも関わらず、砂糖生産の労働者であった華僑の流入は続いたため、失業者になる華僑が増加して治安が悪化するという問題が発生していた。そのためオランダ人の華僑に対する感情が悪化し、1740 年にはオランダ人による華僑虐殺事件が起こって約 1 万人の華僑が虐殺された。この事件以降、VOC は支配地域への華僑の流入を制限するようになったため、福建系華僑のネットワークとの結びつきは弱まっていった。当時東南アジア各地に通商網を広げていた華僑との関係が希薄化したことで、VOC のジャワにおける独占的なネットワークは弱体化していくことになった。[45]

VOC とアジア人商人との関係の変化は、バタヴィアにおけるジャンク貿易の衰退からも読み取ることができる。ジャンク貿易を行っていた華人商人たちは、18 世紀のアジア間貿易において重要な役割を果たしていた。そのため、華人商人たちとの関係を強化しようとした VOC は、自らの拠点であるバタヴィアにジャンク船の寄港を集中させようと試みた。この試みは成功し、1730 年代までバタヴィアにおけるジャンク貿易は順調に発展していた。福建や広東の港を出たジャンク船は、東南アジアで需要の高かった絹織物や磁器をバタヴィアにもたらし、香辛料などの東南アジア商品を購入して持ち帰った。[46] このように、VOC はバタヴィアでアジア間貿易における重要な取引相手であった華人商人たちと深い関係を形成することに成功していたのである。しかし、1730 年以降に、バタヴィアにおけるジャンク貿易は急速に衰退していくことになる。[47] この衰退は、ジャンク貿易そのものが衰退した結果ではなく、ジャンク船の寄港地がバタヴィア以外の他の港に拡散したために起こったものだった。この時期の東南アジアでは、VOC の支配領域の外にある港が急速に発展してきていた。ジャンク貿易を行っていた華人商人たちは、VOC による課税や規制が厳しかったバタヴィアよりも、これらの規制のない港での取引を好んだ。そのためバタヴィア以外の港にジャンク船が寄港するようになると、バタヴィアでのジャンク貿易は衰退していくことになった。[48]

これらの事例は、18 世紀後半に VOC とアジア人商人たちとの協力関係が希薄化していったということを示唆している。前述の通り、VOC にとってアジア間貿易における主な取引相手であったアジア人商人たちとの関係は非常に重要であった。その関係が弱まったことで、VOC はアジア域内で自由に活動することができなくなっていったのである。その背景には、18 世紀後半におけるアジア人商人たちの貿易活動の急速な拡大があった。近年の研究で、1760 年から 1840 年にかけてアジア間貿易の規模の拡大があったということが明らかになっ

(44) Blussé, *op. cit.*, pp. 91-93.

(45) 籠谷、前掲論文、147 頁。

(46) Blussé, *op. cit.*, pp. 115-127.

(47) 1730 年代には年平均 17.7 隻のジャンク船がバタヴィアに来航していたが、1750 年代には年平均 9.1 隻になり、1770 年代には年平均 5.1 隻ほどにまで減少している。*Ibid.*, p. 123.

(48) 太田、前掲論文、150 頁。

た。[49]この貿易拡大の担い手は、VOC ではなく、イギリス人私貿易商人やアジア人商人たちであった。[50] 18 世紀後半のインドにおける EIC の勢力拡大に伴い、イギリス人私貿易商人による貿易が拡大していき、それに刺激される形で中国沿岸や東南アジアでのアジア人商人による貿易活動も急速に拡大していった。結果的に、イギリス人私貿易商人やアジア人商人によるアジア内での貿易活動の拡大は、VOC のアジア間貿易におけるシェアの低下を招き、VOC のアジア間貿易ネットワークを浸食していくことになった。[51]

(5)EIC の状況

ここまで述べてきたように、VOC のアジア間貿易は 18 世紀後半に衰退していき、アジア内で貴金属を効率よく獲得していくことは困難になっていった。これに対し、EIC はほぼ同じ時期に、アジア内で容易に貴金属を獲得できるようになっていた。その原因となったのは、EIC によるベンガル地方の植民地化であった。プラッシーの戦いに勝利した EIC は、1765 年にインドのベンガルとその周辺の州の徴税権を獲得して事実上の植民地とした。これはイギリスによるインド植民地化のきっかけとなったという点で大きな意義を有したが、同時に貿易決済方法にも大きな変化をもたらした。EIC はベンガル地方の徴税権を獲得したことで、そこから上がる税収を手にすることができるようになった。この地域はインドの中でも特に人口が多い地域であり、税収は 1 年で約 300 万ポンドに達した。ベンガル地方は銀経済圏であったため、EIC はこの莫大な税収を銀の形で得ることができた。そのため EIC は、ここで得られた税収を綿織物やアヘンなどのインド産品の購入に充てることが可能になった。その結果、EIC が本国からインドに輸出する貴金属の量は急速に減少し、1770 年頃までには皆無になっている。[52]つまり、VOC がアジア間貿易を通して獲得できる貴金属の量が減少していたのに対し、EIC は容易にアジア内で貴金属を確保できるようになり、綿織物購入のために本国から貴金属を輸出する必要がなくなっていた。これにより、VOC がインド産綿織物の貿易に関して持っていた最大の利点は完全に失われることになった。

5　おわりに

本稿では、18 世紀の VOC がなぜ綿織物を効率よく獲得することができたのかという問題と、それがなぜ衰退することになったのかという問題について検討してきた。VOC の綿織物貿易を支えていたのは、アジア間貿易を通じて貴金属を増加させるというシステムであり、それが

(49)　Anthony Reid, 'A New Phase of Commercial Expansion in Southeast Asia, 1760-1840', in Anthony Reid (ed.), *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900*, London, 1997.

(50)　杉原薫「19 世紀前半のアジア交易圏――統計的考察――」籠谷・脇村編、前掲書、251 頁。

(51)　事例として、18 世紀後半に東南アジアにおいてインド産綿織物の需要が急激に増大し、輸入量が増加していたにもかかわらず、VOC による対東南アジア綿織物輸出量は減少していたことなどが挙げられる。Reid, 'Southeast Asian Consumption of Indian and British Cotton Cloth', pp. 35-42.

(52)　松井透『世界市場の形成』岩波書店、1991 年、216-217 頁。

衰退したのは、18 世紀後半のヨーロッパとアジアの双方で起こった変化によってそのシステムを通して得た利益が失われたからである。

VOC の貿易活動がアジア間貿易に支えられていたという事実は、VOC はヨーロッパに拠点を置く会社でありながら、アジア経済に深く依存していたということと、VOC が当時のアジアにおける貿易活動の「支配者」ではなく、「参加者」の一つにすぎなかったということを示唆している。VOC がアジア商人を排除してアジアにおける貿易活動を独占的に支配していたという解釈は事実に反しており、むしろ、VOC の側がアジア商人との協力関係に依存しているという状況にあった。そのため、18 世紀後半にアジアの経済状況に変化が起こると、VOC はそれに対応しきれず、その貿易活動を衰退させていくことになったのである。従来の解釈では、18 世紀末の VOC の衰退の要因については、会社内部の問題や、オランダ本国の国力の低下など、主にヨーロッパ側の要因が挙げられてきていた[(53)]。しかし、18 世紀アジア経済史に関する新しい解釈に基づくと、VOC の衰退の要因を考察していく際には、それが立脚していたアジアの貿易構造そのものが変化した文脈でとらえる必要がある。

本稿で考察してきた VOC とアジア経済・アジア間貿易との関係から明らかなように、ヨーロッパ諸国によるアジアの植民地化の動きが強まっていた 18 世紀後半においても、ヨーロッパとアジアとの関係は、ヨーロッパ側が経済的に圧倒的に有利な立場に立ってアジア側に一方的に影響を与えるという関係ではなく、両者が相互に影響を与え合うという関係であり、むしろ、アジア側がヨーロッパ側に大きな影響を与えていたという側面さえあった。この事実は、冒頭で提示したように、「常にヨーロッパ側が主体となってアジア側に一方的な影響力を行使し、アジアなどの世界の他の地域を、ヨーロッパを中核とする世界システムに吸収していくことで近代の世界経済が形成されていった」とする従来の世界史像を根本的に見直し、「世界経済」の形成におけるヨーロッパとアジアとの相互の影響を重視した新しい解釈を提示していく必要があるということを示唆している。

(53)　これらの要因に関しては、科野孝蔵『栄光から崩壊へ――オランダ東インド会社盛衰史――』同文館出版、1993 年などを参照。